

# 達成を表わす表現をめぐる対照研究方法論

—フランス語の“arriver/parvenir à+不定詞”表現とそれに対応する中国語・日本語表現—

A methodology for a Contrastive Study of Expressions of Achievement

: “arriver/parvenir à+ *inf.*” Forms in French and Their Corresponding Expressions in Chinese and Japanese

成戸 浩嗣 Koji Naruto  
(現代マネジメント学部)

## 抄 録

フランス語には、

(1) Elle **est arrivée à** le persuader. /彼女は彼を説得**デキタ**。(木村 2016:101)

(2) Je **suis parvenu à** le convaincre. /私はやっと彼を説得する**コトガデキタ**。

(『ロワイヤル仏和中辞典』“parvenir”の項)

のような“arriver/parvenir à+不定詞”形式をとる表現があり、日本語可能表現との間に対応関係が成立する。同表現は、空間的到達を表わす動詞の“arriver/parvenir”が“à”を介して不定詞と組み合わせられ、非空間的到達すなわち「達成」を表わす働きをになうようになって形成されたものであり、発想的には中国語の“V到”表現と同様である。成戸 2014:28-33 においては、“V到”表現とそれに対応する日本語可能表現との対応関係を取り上げてその成立要因について考察を行ない、“V到”表現は可能表現としての性格を備えているとしたが、同様のことは“arriver/parvenir à+不定詞”表現についてもあてはまる可能性がある。系統を異にするフランス語、中国語の間に同じような発想の表現形式がみられるという現象からは、成戸 2019 a、同 2019 b でとり上げた可能形式“savoir+不定詞”、“会V”の場合と同様に、個別の言語の枠を越えた、可能表現全般について考えるためのヒントが得られそうである。本稿は、フランス語の“arriver/parvenir à+不定詞”表現を主たる考察対象とし<sup>1)</sup>、中国語の“V到”表現や日本語の可能表現、さらには可能を表わす日本語の自動詞表現との比較を通じて、個別の言語のみを対照とした従来の考察方法によっては明らかにされなかった各表現の特徴や、言語によって異なる「達成と可能の関係」について考察を行なうための着眼点、分析方法、予測される結論などを探ることを目的とする。

## キーワード

達成/可能	achievement/possibility	到達	arrival
動作/状態	action/state	混合形式	hybrid form
実現(系)可能	actual possibility		

## 目 次

- 1 「達成」を表わす“arriver/parvenir à+不定詞”
- 2 “arriver/parvenir à+不定詞”と“V到”
- 3 “arriver/parvenir à+不定詞”と日本語の可能形式
- 4 “arriver/parvenir à+不定詞”表現と日本語自動詞表現
- 5 “arriver/parvenir à+不定詞”と中国語の可能補語
- 6 おわりに

## 1 「達成」を表わす “arriver/parvenir à+不定詞”

“arriver/parvenir à+不定詞”形式をとる表現には(1)、(2)のほか、さらに

- (3) Cet enfant **arrive** déjà **à** écrire son nom.  
 /この子はもう自分の名前が書ケル。  
 (『ロワイヤル仏和中辞典』“arriver”の項)
- (4) J'**arrive** **à** vivre, mais c'est tout juste.  
 /なんとかか食べてはイケルけれど、やっとというところだ。  
 (『プログレッシブ仏和中辞典』“arriver”の項)
- (5) Elle **arrive** tout juste **à** dire deux mots en russe.  
 /彼女はロシア語は二言三言しか言エナイ。  
 (『ディコ仏和中辞典』“arriver”の項)
- (6) Simone **est parvenue** **à** entrer à la Banque d'Indochine et de Suez, mais ça n'a pas été sans peine.  
 /シモーヌはインドシナ・スエズ銀行に就職デキタのだけれど、それも大変だったのよ。  
 (21世紀:828)
- (7) Je voudrais savoir de quelle manière il faut s'y prendre pour **parvenir** **à** parler couramment le français.  
 /どういうふうに取り組めばフランス語をペラペラ話セルようになるのか、知りたいのですが。(同上)
- (8) Couche-toi de bonneheure, sinon tu **ne parviendras pas** **à** te lever demain matin.  
 /早めに寝なさい。さもないと明日の朝起きラレナイよ。  
 (『ロベール・クレ仏和中辞典』“parvenir”の項)

などが挙げられ、いずれも日本語可能表現が対応している。

“arriver/parvenir”は動詞としても働く成分であり、

- (9) Nous **arriverons** **à** Paris demain.

(私たちは明日パリに着きます。)

(同上 “arriver” の項)

- (10) L'eau m'**arrivait** **aux** genoux.  
 (水は私の膝に達しようとしていた。)  
 (『クラウン仏和中辞典』“arriver”の項)
- (11) À la troisième tentative, il **est** enfin **parvenu** **au** sommet de la montagne.  
 (彼は3度目のアタックでやっと頂上に達した。)  
 (『ロワイヤル仏和中辞典』“parvenir”の項)

- (12) Ta lettre m'**est parvenue** hier.  
 (君の手紙はきのう届いた。)  
 (『新スタンダード仏和中辞典』“parvenir”の項)

のような空間的到達を表わす用法のほか、

- (13) Tu **arrives** **à** l'âge adulte.  
 (君も大人の年齢になったね。)  
 (『ロベール・クレ仏和中辞典』“arriver”の項)
- (14) Sa dette **arrive** **à** vingt mille euros.  
 (彼(女)の借金は2万ユーロに上る。)  
 (『ロワイヤル仏和中辞典』“arriver”の項)

- (15) Sa grand-mère **parvint** **à** un âge avancé. (彼の祖母は長生きした。)  
 (『ロベール・クレ仏和中辞典』“parvenir”の項)

- (16) Ces pommes **ne sont pas parvenues** **à** maturité.  
 (これらのリンゴは熟すに至らなかった。)  
 (『ロワイヤル仏和中辞典』“parvenir”の項)

のような非空間的到達を表わす用法がある。“arriver/parvenir”の動詞としての働きは、

- (17) Il **arrive** toujours **à** ses fins.  
 (彼はいつでも自分の目的を遂げてしまう。)  
 /彼はいつも目的を達成する。  
 (『ロベール・クレ仏和中辞典』、『プログレッシブ仏和中辞典』“arriver”の項)

- (18) Mon grand-père **parvenait** toujours à ses fins.  
 (祖父は常に目的を達成していた。)  
 (『ロベール・クレ仏和辞典』“parvenir”の項)

のような目的達成を表わす用法にまでおよび、不定詞と組み合わせられた“arriver/parvenir à+不定詞”形式をとるにいたって“arriver/parvenir”の動詞としての意味は希薄となり、不定詞の表わす動作の達成を表わす働きをするようになったと推察される。

「達成」は「可能」と深い関わりを有する概念であり、このことは、成戸 2019b:109 で引用した寺村 1982:269 の記述、すなわち「日本語の可能態の表わしている中心的な意味は、『何々しようと思えば、その実現についてさまたげるものはない』ということだといってよいかと思う」における「実現」を「達成」に置き換えられることからもうかがわれよう。「達成」と「可能」のこのような関係を念頭において“arriver/parvenir à+不定詞”の働きをみれば、同形式には可能の意味が含まれているということが予測される。日本語可能表現が表わすコトガラの場合には、寺村が「そのような状態は、一時的なものであることもあるが、恒常的といってよい場合もある」としているように「状態」であるという特徴を有するのに対し、“arriver/parvenir à+不定詞”表現が表わすコトガラは、空間的到達を表わす“arriver/parvenir”の語彙的意味からみても明白なように動作としての性格が強いととも、主体が行なう動作の結果としての側面をも有する。このことは、例えば

- (19) Je **suis arrivé** à nager avec tous mes efforts.  
 (一生懸命練習して泳げるようになった。)  
 (佐藤・山田 2011:83)

- (20) Il s'est exercé, exercé, exercé et il **est parvenu** à obtenir le premier prix.  
 (彼は練習に練習を重ねた末に、ようやく1等賞を取ることができた。)(21世紀:828)

のような、達成するための努力がはらわれた(=動作が行なわれた)ことを明示する表現に端的にあらわ

れており((6)の場合は明示されていないが表現内容からそれが読みとれる)、達成はその努力(=動作)の結果として生じている。

“arriver/parvenir à+不定詞”表現とは異なり、

- (21) Il **ne sait pas** nager, même pas un mètre.  
 (彼は、1メートルも泳げない。)  
 (佐藤・山田 2011:80)

- (22) Serge est malade. Il **ne peut pas** venir aujourd'hui.  
 (セルジュは病気だ。今日は来られない。)  
 (六鹿 2016:250)

のような“savoir/pouvoir+不定詞”表現の場合には、成戸 2019a:60-61 で述べたように、「主体に備わった能力によってできる」ことを表わす“savoir+不定詞”の“savoir”は恒常的な状態を表わし、「主体とは切り離された外的状況の下でできる」ことを表わす“pouvoir+不定詞”の“pouvoir”は一時的な状態を表わすというように、いずれも状態を表わすこととなる<sup>2)</sup>。このことは例えば、(21)のような“savoir+不定詞”表現を

- (5) Elle **arrive** tout just à dire deux mots en russe.

のような“arriver à+不定詞”表現と比較すれば理解しやすい。両者は発話時における主体の能力が一定の水準に達していないために「できない」ことを前提としている点において共通する一方、(5)は「到達する」という“arriver”の語彙的意味からみて「達成」のための努力過程が視野に入っていると考えるのが自然であり<sup>3)</sup>、この点において恒常的な状態を表わす(21)とは異なると考えられる。同様のことは“parvenir à+不定詞”表現についてもあてはまるが、この点については後述する。“savoir/pouvoir+不定詞”表現の場合には、例えば

- (23) Il n'a pas **su** convaincre ses électeurs.  
 (彼は有権者たちを納得させられなかった。)  
 (21世紀:749)

- (24) J'**ai pu** ouvrir la porte avec un tournevis.  
 (私はねじ回しでドアを開けることができた。)(六鹿 2016:250)

という複合過去形の形をとっていたとしても“savoir/pouvoir”はやはり状態を表わしていると考えられ、このことは、(24)について六鹿 2016:250が、「私はドアを開けた。それが可能だった」としていることとも符合する。この場合の「可能だった」は「できる状態だった」と言い換えることができよう<sup>4)</sup>。(23)、(24)の前提となっている客観的事実を前提として“arriver/parvenir à+不定詞”表現を用いることができる可能性もあり、もしそうであれば、“savoir/pouvoir+不定詞”表現との間におけるコトガラのとらえ方の相違やニュアンスの相違を探ることで、二者の使い分けをより厳密に記述することができよう。

「達成」のための努力過程を視野に入れてコトガラを表わす“arriver/parvenir à+不定詞”表現の特徴は、以下のような否定表現の場合に一層鮮明にあらわれる。例えば

- (25) J'ai reçu un mèl avec un document joint mais je **n'arrive pas à** l'ouvrir.  
 (添付書類付きのメールをもらったんだけど、開けられないんだ。)  
 (NHK2003年9月:20-21)

は「添付書類を開ける操作をしたにもかかわらず開けられない」という客観的事実を、

- (26) Zut, c'est ennuyeux, je **ne parviens plus à** me concentrer.  
 (いやあ、困ったな。もう集中できないや。)  
 (21世紀:828)

は「集中しようとしてもできない」という客観的事実をそれぞれ前提とした表現である。“arriver/parvenir à+不定詞”の否定形は、「(達成するための)努力をはらったにもかかわらず目的が達成できない(or できなかった)」ことを表わすため、対応する日本語表現が「ドウシテモ～ナイ」の形をとる

- (27) Sanae **n'arrive pas à** prononcer le mot “fleur” malgré tous ses efforts.  
 /早苗は、頑張ってみるものの、**ドウシテモ** “fleur” という単語の発音が**デキナイ**。  
 (同上)

- (28) Je **ne parviens pas à** comprendre ce que Tolstoï veut dire dans son roman.  
 /僕にはトルストイがその小説で言いたいことが、**ドウシテモ分カラナイ**よ。  
 (同上:829)

のようなケースもしばしばみられる<sup>5)</sup>。

ところで、『プログレッシブ仏和辞典(“parvenir”の項)』、『ロワイヤル仏和中辞典(“parvenir”の項)』が“parvenir”について、それぞれ「(努力して) [人が] …に達する、到達する」、「(努力して) 到達する、たどり着く」と示していることや、『クラウン仏和辞典(“parvenir”の項)』が“parvenir à+不定詞”について「(苦勞して…に) 成功する、**やっ**と…できる」と示していることから、同形式が表わすコトガラにおいては、“arriver à+不定詞”の場合に比べ、達成のための努力においてまさっていることがうかがわれる。この点については、両者の類義形式であり、より抽象的な概念を表わす動詞を用いた“finir par+不定詞(ついに～する、結局～する)”、“réussir à+不定詞(～[するの]に成功する)”なども比較の対象に加え、それらの使い分けを探っていくことが厳密な記述につながると考えられる。このような方法は、佐藤・山田 2011:83に、「とうとう～する」という意味は“arriver à+不定詞”や“reussir à+不定詞”のほか

- (29) J'**ai fini par** lire ce livre.  
 (やっこの本を読み終えた。)  
 (佐藤・山田 2011:83)

のように“finir par+不定詞”によっても表わすことができ、「やっ」というニュアンスを強く出すには“arriver à+不定詞”形式をとる(19)よりも

- (30) J'**ai fini par** nager avec tous mes efforts.  
 (同上)

の方が適切である旨の記述がみられることからヒントを得たものである。

2 “arriver/parvenir à+不定詞”と“V到”  
 “arriver/parvenir à+不定詞”と同様の発想で「達成」を表わすのに用いられる中国語の表現形式と

しては、“V到”が存在する。“到”は、“arriver/parvenir”の場合と同様に動詞として空間的到達を表わす

- (31) 飞机什么时候到?  
(飛行機はいつ到着しますか。)  
(郭春貴 2001:364)
- (32) 他到了东京, 就去找他老师了。  
(彼は東京に着いた後、すぐ彼の先生を訪ねました。)(同上)

や非空間的到達を表わす

- (33) 不到五点你不能走。  
(5時にならないと、行ってはいけない。)  
(同上)
- (34) 他还没到六十岁就退休了。  
(彼は60歳にならないうちに、仕事をやめた。)(同上)

のような働きを有するほか、

- (35) 他一直把我送到村口。  
(彼は私を村のはずれまで送ってくれた。)  
(《現代漢語八百詞》、『中国語文法用例辞典』“到”の項)
- (36) 他跑到复旦大学。  
(彼は復旦大学まで走った。)  
(陈永生 1992:350) ※日本語訳は筆者
- (37) 找到天亮还没有找着李强。  
(明け方まで探したが、李強を見つけられなかった。)  
(《現代漢語八百詞》、『中国語文法用例辞典』“到”の項)

のように“V到+N”形式で用いられ、Vが表わす動作の空間的あるいは時間的到達点を示す働きをも有する。“到”が「達成」を表わすのは、例えば

- (38) 这本书我到处托人买, 今天可买到了一本。  
(この本を、私は買っておいてくれるようあちこちで頼んであったが、今日やっと買うことができた。)  
(《实用现代汉语语法》:330、丸尾 1997:115)

のように、“V到+N”においてVが他動詞、Nが客体を表わす目的語となっている場合である。(38)は、「あらかじめ行なおうとしていた動作が完結した」ことを表わしている。但し、このような特徴をもつ“V到+N”表現の中には、

- (39) 这是偶然捡到的。  
(これは偶然ひろったものです。)  
(荒川 1989:18) ※日本語訳は筆者

のような「偶然の結果(本来は行なうつもりがなかった動作をなりゆきによって行なうこととなり、それが完結した)」を表わすケースも存在する<sup>6)</sup>。

これに対し、“arriver/parvenir à+不定詞”表現の場合には、不定詞として用いられる動詞が他動詞に限定されず、(8)、(26)のような代名動詞を用いたケースや、(4)、(6)、(19)あるいは

- (40) Comme je n'arrivais pas à dormir,  
j'étouffais à moitié.  
(眠れなかったので息がつまりそうだった。)  
(『新フランス文法事典』“arriver”の項)

のような自動詞を用いたケースが存在することに加え、“V到”表現のように「偶然の結果」を表わす用法をもたない。これらのことは、21世紀:828が“arriver/parvenir/réussir à+inf.”について「ここでの不定法は、よい結果を意味としてもたらす」とし、参考として英語の“succeed in+現在分詞”を示していることとも矛盾せず、“arriver/parvenir à+不定詞”が“V到”の場合よりも広範な領域の「達成」を表わす働きを有すること、主体があらかじめ意図した動作の実現を表わす働きに特化した形式であることを示している。

“arriver/parvenir”が“arriver/parvenir à+不定詞”形式で用いられる場合には、「到達」を表わす動詞として用いられる場合に比べれば意味的に抽象化しているといえることができるものの、動詞としての性格をとどめていると考えられる。このことは、『ディコ仏和辞典(“à”の項)』に、「(動詞+)à+不定詞」形式が表わす意味の一つとして「[動作の対象]…することを」が示され、“apprendre à conduire(車の運転を習う)”、“renoncer à partir(出発することを諦める)”のような「他動詞+a+不定詞」形式、“aider qn à+不定詞((人)が…するのを

助ける) ”のような「他動詞+qn+a+不定詞」形式、“se mettre à+不定詞(…し始める)”のような「代名動詞+a+不定詞」形式が挙げられていることから推測できよう。また、『フランス文法事典(“arriver”の項)』に「arriver à+inf., à ce que+subj. […するに至る]」と示されていることや、『新フランス文法事典(“arriver”の項)』に「arriver à 不定詞[à ce que+接] (=réussir à, parvenir à)」と示されていることから、“arriver/réussir/parvenir+不定詞”における“arriver/réussir/parvenir”が、

- (41) Vous **n’arriverez pas à ce qu’il cède.**  
 (あなたは彼を譲歩させることはできませんでしょう。)  
 (『ロワイヤル仏和中辞典』“arriver”の項)
- (42) Nous voudrions **arriver à ce que** chacun fasse son possible.  
 (めいめいが全力をつくせるようになりたいものだ。)  
 (『新フランス文法事典』“arriver”の項)

のような“arriver à ce que+接続法”表現における場合と同じく動詞としての性格を強くとどめていることがうかがわれる。この反面、佐藤 1992:93 が、“pouvoir”、“devoir”とともに“commencer à”、“continuer à”などを「準動詞」と認定していることから、“arriver/parvenir à+不定詞”における“arriver/parvenir à”も同様に準動詞あるいはそれに近い成分としての性格を帯びているのではないかという考えがうかんでくる。このような予測のもとに考察をすすめるのであれば、可能を表わす“savoir/pouvoir+不定詞”における“savoir/pouvoir”の場合と比較して動詞的性格の強弱を確認しておく必要がある。成戸 2019 a :57 で述べたように、“pouvoir”は“savoir”よりも可能を表わす助動詞としての性格が強い(機能語化の度合いが高い)のに対し、動詞としても用いられる“savoir”は、“savoir+不定詞”形式においても具体的な動作の意味をとどめているため、“savoir+不定詞”は“pouvoir+不定詞”に比べると可能形式(=文法形式)としての完成度が相対的に低いこととなり、語彙的意味をとどめつつも文法形式への移行が進んだ「混合形式」と位置づけることができる。このことは、

佐藤 1992:93 において「準助動詞」と認定されているものの中に“savoir”が含まれていないということとも符合するのであるが、一方では、成戸 2019 a :56 で述べたように、“savoir+不定詞”における“savoir”は、同じく不定詞と組み合わせられて可能を表わす“pouvoir”、義務を表わす“devoir”、願望を表わす“vouloir”などととも「助動詞」、「副次的助動詞」、「準助動詞(or 半助動詞)」、「助動詞的な働きをする動詞」などとよばれるのが通例である。これらのことから、“savoir”の動詞的側面、助動詞的側面のいずれが際立つかは、他のいかなる形式と比較するかによって異なるものと推察され、動作としての性格が強いものとしてコトガラを表わす“arriver/parvenir à+不定詞”と比較した場合には、「恒常的な状態」を表わす働きを有する“savoir+不定詞”の動作性は相対的に弱いと判断され、“savoir”の助動詞的側面が際立つこととなるのである。このことは、“arriver/parvenir à+不定詞”は“savoir+不定詞”に比べると文法形式としての完成度が低く、“arriver/parvenir à”の機能語化の度合いも“savoir”に比べて低いということの意味する<sup>7)</sup>。

一方、成戸 2014:11-12 で述べたように、“V到”における“-到”は自動詞としての性格、「到達する」という動詞としての語彙的意味をとどめつつも、組み合わせられる個々のVの側からみれば一定の共通した働きをする成分としてその意味が抽象化されており、この点ではフランス語の“arriver/parvenir à+不定詞”における“arriver/parvenir”の場合と同様である。但し、“V到”が従来から「動詞+結果補語」構造と位置づけられてきたことにもあらわれているように、“-到”はいわゆる本動詞ではなく、主要部はVの部分であって“-到”は補助的な成分である<sup>8)</sup>。これに対し“arriver/parvenir à+不定詞”における“arriver/parvenir”の場合には、意味の上で抽象化されているにせよ、“savoir+不定詞”における“savoir”との比較によっても明白なようにその機能語化の度合いが相対的に低く(=動詞的性格が相対的に強く)、この点は“V到”と比較した場合においても同様であると考えられる。また、動詞単独では動作の過程(働きかけ)を表わすにとどまる傾向の強い中国語においては、“V到”であればVの部分の客体に働きかける動作の過程段階(日本語の「～(し)ようとする」に相当するケースが多い)を、“-到”の部分の動作の結果としての完結

段階をそれぞれ表わすこととなる。このことは、例えば

- (43) 买了半天, 可是**没买到**。  
 (何とか買おうとしたが、買えなかった／買うことができなかった。)  
 (成戸 2014:16、荒川 1982:83)

※日本語訳は筆者

- (44) 找了, 可是**没找到**。  
 (さがしたが、見つけれなかった／見つけることができなかった。)  
 (成戸 2014:28、荒川 1981:20、同 1982:82)

※日本語訳は筆者

- (45) 我看了一看, 可是**没看到**。  
 (見ようしたが、見えなかった／見られなかった／見ることができなかった。)  
 (成戸 2014:30)

のような否定表現の場合に鮮明にあらわれる<sup>9)</sup>。このように中国語には、動作の過程段階と完結段階が別個の成分によって表わされるという現象があるため、“V**到**”における“-**到**”の役割が“arriver/parvenir à+不定詞”における“arriver/parvenir”のそれと全く同じでないことは容易に想像がつく。“V**到**”においては、“-**到**”が動作の過程段階を表わす傾向の強い中国語動詞に後置されて完結段階を表わす働きをするとともに、前述したように「達成」、「偶然の結果」を表わす働きを兼ね備えているため、同形式は“arriver/parvenir à+不定詞”とは異なり、主体があらかじめ意図した動作の実現を表わす働きに特化した形式ではないということとなる。

ところで、“V**到**”については、前述したように「動詞+結果補語」であるとする見方が従来の主流であり、教育の場においてもそのように説明されるのが通例であるが、成戸 2014:28-29 で述べたように可能形式としての性格を有し、このことは主として、「動詞+結果補語/方向補語」をいわゆる可能補語の形式である「動詞+“得/不”+結果補語/方向補語」とともに可能表現の系列を構成する形式の一つと位置づける考え方に支えられている<sup>10)</sup>。このため、(43)~(45)や

- (46) 戏票**买到**了。／芝居の切符が買**エマシタ**。  
 (郭春貴 2001:319)  
 (47) 乌鸦把小石子仍进瓶里, 里面的水一点一点地

慢慢增高, 终于, 乌鸦快活地**喝到**水了。  
 /カラスは小さな石をくちばしでくわえて瓶の中に入れました。瓶の水は少しずつ増えて、カラスはこうして楽しく水を**飲めました**。  
 (馬俊栄 2009:119、映画《漂亮妈妈》)

のような“V**到**”表現と日本語可能表現との対応例もめずらしくない。

一方、“arriver/parvenir à+不定詞”は、達成を表わす形式としての完成度において“V**到**”にまさるため、可能との関わりが“V**到**”の場合よりも強いことが予測されるものの、この点に関しては達成と可能の関係についてのさらなる検討を経なければならぬ。“arriver/parvenir à+不定詞”が可能形式としての性格を帯びている可能性は、これまでに挙げた日本語可能表現との対応例からもみとれる。また、否定形で用いられている(25)~(28)、(40)のようなケースは、主体が努力をはらったにもかかわらず目的が達成できない(or できなかった)ことを表わしており、このことから、“arriver/parvenir à+不定詞”の否定形に相当する部分は、中国語においては

- (48) 人太多, 票**买不到**。  
 (混んでいるために、切符が買えない。)  
 (成戸 2014:56)  
 (49) 电话机里老嗡嗡响, **听不到**对方的话。  
 (電話の雑音がひどくて、相手の話が聞こえなかった。)  
 (同上:67、《动词用法词典》“听”の項を一部修正)  
 (50) 这会儿**吃不到**青菜。  
 (このごろは野菜を食べることができない。)  
 (同上:54)  
 (51) 因为漆黑, 我什么也**看不到**。  
 (真っ暗で何も見えない。)(同上:95)

のように可能補語の否定形、すなわち“V**不到**”によって表現することができると考えられる。周知のように、中国語の可能補語形式は、ある事態・状況を実現させようと働きかけた結果、それらの事態・状況が実現できた場合には肯定形が、実現できな

った場合には否定形が用いられるからである<sup>11)</sup>。但し、“V到”の否定形としては(43)～(45)におけるような“没V到”も存在するため、同形式を含めて“arriver/parvenir à+不定詞”の否定形との対応関係について検討を重ね、その詳細を明らかにする必要がある。(43)～(45)のようなケースが存在することは、“V不到”だけでなく“没V到”も“arriver/parvenir à+不定詞”の否定形との間に用法上の共通点・相似点あるいは接点を有する可能性を示唆していると考えられる。“V不到”をはじめとする可能補語形式は、

- (52) 昨天的报告我也听不懂。  
(昨日の講演は僕も聞いて理解できなかった。) (張・佐藤・内田 1997:126)
- (53) 明天的报告我肯定听不懂。  
(明日の講演は聞いても僕はきっと理解できないだろう。) (同上)

がいずれも成立することからもみてとれるように時間の流れにかかわりなく用いられるようであり、コトガラを純然たる動作というよりは状態に近いものとして表わす形式であるように見受けられる。一方、“没V到”の場合には、(43)～(45)の“没买到”、“没找到”、“没看到”がそうであるように、発話時以前における「動作の達成」の否定を表わす形式であることができる。これらの点については、劉月華 1992:13, 19が“‘没’+動補連語”について「動作が実現していないのはもちろんのこと、結果も実現していない」として

- (54) 他只顾往前走，没看见旁边的车。  
(彼は前に進むことばかりに気をとられ、そばの自動車が目に入らなかった。)  
(劉月華 1992:13)

を挙げていることや、「否定詞+動詞/動補連語」について「“没[有]”が否定するものは動作の発生、完成および結果など」としていること、さらには王学群 2008:34-36が、“看不到”、“看不见”は「一定の条件下における不可能」を表わすのに対し、“没(有)看到”、“没(有)看见”は「一般的に時間軸上における一回性の具体的な運動(または一時的な状態)として表現される」としていることによっても理解でき

よう<sup>12)</sup>。“没V到”が発話時以前における「動作の達成」の否定を表わす形式であるという点は、郭春貴 2001:335に挙げられている

- (55) 昨天的菜你**没吃完**啊?  
(昨日の料理は全部食べなかったの?)  
(郭春貴 2001:335-336)
- (56) 昨天他没来，**没看见**他。  
(昨日彼は来なかったの、会わなかった。)  
(同上)

の“没吃完”、“没看见”も同様であり、コトガラは時間の流れに沿って表わされている。特に、(56)においては“他没来”と“没看见他”が因果関係にあり、“没看见”における動作の否定という側面が明確となっている。これらのことは換言すれば、(55)、(56)においてはコトガラが純然たる動作として表現されているということであり、このような場合には可能補語形式は用いられないようである<sup>13)</sup>。ちなみに、張・佐藤・内田 1997:126-127が

- (57) 昨天的报告我**没听懂**。  
(昨日の講演は僕は聞いてわからなかった。)  
(張・佐藤・内田 1997:126)

の“没听懂”は客観的な事実を述べているのに対し、(52)、(53)の“听不懂”は主観的な評価や態度について述べているとしていることは、前者はコトガラを時間の流れに沿って表わすのに対し、後者はコトガラを時間の流れとは無関係なものとして表わすということと表裏一体をなしているように思われる。主観的な評価や態度は客観的な事実と比べ、時間の流れによる制約を受けにくいと考えられるためである。このように、“没V到”はコトガラを純然たる動作として表わす形式であり、この点においては、コトガラを動作としての性格が強いものとして表現する“ne arriver/parvenir pas à+不定詞”との間に相似点を有するということができよう。

以上のように、“arriver/parvenir à+不定詞”、“V到”は「到達」から「達成」を表わすにいたった形式である<sup>14)</sup>点において共通する一方、後者の場合にはVが「客体を表わす名詞を目的語とする他動詞」に限定される点、「偶然の結果」を表わす働きも備えている点、“-到”が動作の完結段階を表わす働きを兼ねる補助的な成分である点において前者と



は異なり、達成を表わす形式としての完成度においては、“arriver/parvenir à+不定詞”の方がまさっているということができよう。一方、“V到”の否定形としては“V不到”、“没V到”が存在し、いずれも“ne arriver/parvenir pas à+不定詞”との間に用法上の共通点・相似点あるいは接点を有し対応関係を成立させる可能性がうかがわれた。但し、“arriver/parvenir à+不定詞”自身に可能形式としての性格が備わっているか否かについても検証しておくことが必要であり、そうすることで記述がより厳密なものとなる。次章では、“arriver/parvenir à+不定詞”表現が表わすコトガラにおける「達成」と「可能」の関わりという側面からこの点について探っていくこととする。

### 3 “arriver/parvenir à+不定詞”と日本語の可能形式

1では、日本語の可能態についての寺村1982の記述を参考にして達成と可能の関わりについてふれ、達成を表わす“arriver/parvenir à+不定詞”表現が表わすコトガラは動作としての性格が強いのに対し、“savoir/pouvoir+不定詞”のそれは状態であるとした。六鹿2016:250が

(24) J' ai pu ouvrir la porte avec un tournevis.

という表現例を挙げて「pouvoirを複合過去や単純過去など『終点まで至った』ことを含む時制で使うと、不定詞の事態は『行なわれた』ことを表します」としているのは、“pouvoir”に達成が含意されていることを述べているというよりは、1で述べたように「できる状態だった」と解するのが自然であろう。

日本語における「達成」と「可能」の関わりについては、寺村1982以外においてもしばしば言及されている。例えば、『日本語学キーワード事典(「可能表現」の項)』は、動詞の可能形の「タ形」はある行為の達成の意を表わすことも可能であるとして

(58) 大西さんは難しい曲を暗譜で弾ケタ。  
(『日本語学キーワード事典』「可能表現」の項)

という表現例を、森田1989:1215は「(困難な)事態の実現」を表わす例として

(59) あんな高い飛び箱だったが、一回で飛ベタ。  
(森田1989:1215)

をそれぞれ挙げている。また、渋谷1993:1-2、14-15は可能表現の意味を、動作の実現(非実現)を含まない「潜在系(potential)の可能」、動作の実現(非実現)を含まない「実現系(actual)の可能」に分けている<sup>15)</sup>。同様に、『日本語文法事典(「可能」の項)』は、日本語の可能形式には

(60) 今朝は目覚ましなしでも起きラレタ。  
(『日本語文法事典』「可能」の項)

のような「(実現が危ぶまれたり、強く期待されていた)行為の実現」、すなわち「実現(系)可能」とでも呼ぶべき意味を表わす場合があり、いわゆる「狭義の可能」と区別するのが現在では普通であるという渋谷1993、同2006の考え方を紹介している<sup>16)</sup>。さらに井島1991:160-161には、「可能」は「状態性」という意味素性をもつことから理解できるように本来は潜在的なものであり、事態が実現したことを表わす可能表現の働きは補助的・付加的なものである旨の記述がみられる。一方、川村2004:116-117は、日本語可能表現が表わす「可能」の意味の一つとして<意図成就>、すなわち「やろうとしてその行為が実現したこと=意図した行為の意図どおりの実現」を表わすことを挙げているのに対し、尾上1999:91は、許容性・萌芽の有無を問題にする「可能」と、結果的成就を正面に出して表現する「意図成就」とは、遠く離れた二つの用法であるとしている<sup>17)</sup>。これらの記述からは、「達成」すなわち「実現」を表わす働きを「可能」の範疇におさめるか否か、おさめるとすればそれをどのように位置づけるかについて異なる考え方が存在することがうかがわれる。しかしながら、井島1991:185が「日本語では、実現された事態までを含意する専用の形式がない」としていることや、可能形の「タ形」が達成を表わすことからみても「実現(系)可能」という範疇をもうけることは許容されてもよく、少なくとも、「実現(系)可能」を「意図成就」として「可能」から分離するよりは、意図成就と可能の接点あるいは連続性をさぐる方が言語事実に沿った客観的な記述につながると思える上、尾上2003:36-37における「ラレル文」の「可能」、「意図成就」の働きの発生過程に関する記述とも矛盾しない。

ところで、「弾ケル→弾ケタ」、「飛ベル→飛ベタ」、「起きラレル→起きラレタ」のように可能形式が「タ形」をとることによって起こる意味の変化は「可能→達成」という方向性を有し、このことは1で紹介した寺村 1982:269 の記述からもうかがわれる。この点は、否定形の「弾かなかった」、「飛ばなかった」、「起きなかった」と「弾ケナカッタ」、「飛ベナカッタ」、「起きラレナカッタ」の場合も同様であり、中国語において“没(有)V到”、“V不到”の使い分けがみられるのとは対照的である。「可能→達成」は「状態→動作」と言い換えることも可能である(但し「方向性」であるから、完全な動作に移行すると考える必要はない。3でとり上げた複合過去形の“pouvoir+不定詞”表現である(24)についての記述とも矛盾のないようにする必要がある)<sup>18)</sup>。一方、“arriver/parvenir à+不定詞”表現が表わすコトガラについては、動作としての性格が強いととも、主体が行なう動作の結果としての側面を有するとしたが、このことは同表現が状態性を帯びることを排除するものではない。例えば“arriver/parvenir”が現在形で用いられる場合には、発話時に一定のレベルに到達していることを表わし、これを「動作の結果としての状態」と解することができよう(この場合の「動作」は「達成するための努力」を指す)。また、

(40) Comme je **n'arrivais pas** à dormir,  
j'**étouffais** à moitié.

のように半過去形で用いられる場合、「半過去形は過去の状態を表わす」としばしば説明されるように、その状態性は明白である。このため、“arriver/parvenir à+不定詞”は、日本語動詞の可能形の場合とは反対に「達成→可能」という意味変化の方向性、換言すれば「動作→状態」という方向性を有する形式であるという見方ができよう。ついでながら、“arriver/parvenir”が複合過去形の形をとる(1)、(2)、(6)、(19)、(20)のようなケースや、単純未来形の形をとる(8)のようなケースは、動作そのものの意味を強くとどめており状態性がより希薄であると考えられるため、「可能」との距離が相対的に遠いものと位置づけることができるのではなかろうか<sup>19)</sup>。達成と可能の間に連続性が存在することを認める立場をとるのであれば、このように相対的な位置づけをすることが求められるのである。

「達成→可能」という意味変化の方向性は、中国語

の“V到”についてもあてはまり、変化の過程においてどのような要因が働くかという点において、「達成」を表わす働きに特化した“arriver/parvenir à+不定詞”との間に相似点がみられる。2で述べたように、“V到”表現と日本語可能表現との間に対応関係が成立する要因の一つとしては、「動詞+結果補語」とされてきた“V到”が可能形式としての性格を有することが挙げられるが、成戸 2014:32-33ではこのほか、話者の主観的判断が“-到”から読みとられた結果であることも要因の一つであるとした。すなわち、“-到”は動作の完結を確定する働きを有するとともに、例えば

(61) 越汉辞典我今天**可买到**了一本。

(越漢辞典今日**やっ**と**買エタ**/買う**コトガ**  
**デキタ**よ。)(成戸 2014:32、讚井 1996:31)

※日本語訳は筆者

にみられるように動作の完結に対する話者の肯定的な主観的判断を表わす成分との結びつきが強く、この点において「達成」を表わす日本語可能表現との間に意味上の接点を有するという点である。このような視点からフランス語の“arriver/parvenir à+不定詞”と日本語可能表現との対応例をみると、(2)、(4)、(20)について類似の現象が観察される。すなわち、(2)の「やっ」と、(4)の「なんとか」、(20)の「ようやく」に対応する成分はフランス語表現には含まれていないものの、これらは“arriver/parvenir à+不定詞”表現からそのような意味を読みとった結果であり、「達成」を表わす日本語可能表現との間に意味上の接点を見いだすことができる。このことは、《法汉词典(“arriver”、“parvenir”の項)》、《新簡明法汉词典(“arriver”、“parvenir”の項)》に、“arriver/parvenir à+inf.”の意味として“能够”、“成功”、“达到”とともに“终于”、“(终于)做到”が挙げられていることとも符合する<sup>20)</sup>。

以上のように、“arriver/parvenir à+不定詞”は、状態を表わす“savoir/pouvoir+不定詞”とは異なる形ではあるが可能形式としての性格を備えており、フランス語において「実現可能」を表わすのに用いられる表現形式であると位置づけることができる。

#### 4 “arriver/parvenir à+不定詞”表現と日本語自動詞表現

“arriver/parvenir à+不定詞”表現に対しては日本語可能表現が対応するケースのほか、

(62) Je n'arrive pas à trouver mon stylo.  
／どうしても万年筆が見ツカラナイ。  
(『ロワイヤル仏和中辞典』“arriver”の項)

(63) Il est parvenu à obtenir sa mutation.  
／やっと転勤の希望がカナッタ。  
(『クラウン仏和辞典』“parvenir”の項を一部修正)

のように、無情物について述べる日本語自動詞表現が対応するケースがみられる。言うまでもなく、自動詞表現には主体を表わす成分が含まれず、コトガラは動作ではなく状況として表現される。この点において、有情物を主体とし、コトガラを動作としての性格が強いものとして表現するフランス語の“arriver/parvenir à+不定詞”表現の場合とは対照的である。(62)、(63)の日本語自動詞表現はそれぞれ、

(62)' どうしても万年筆がを見つけラレナイ／を見つけたコトガデキナイ。

(63)' やっと転勤の希望がかなえラレタ／をかなえるコトガデキタ。

のような可能表現と同じ客観的事実を前提としている<sup>21)</sup>。

自動詞表現が可能を表わすケースについては、『日本語教育事典(「可能の表現」の項)』が、自動詞の「見える、聞こえる、分かる、入る、要る」などは可能の意を表わすことがあるとして

(64) ここなら花火がよく見エル。  
(『日本語教育事典』「可能の表現」の項)

(65) このかばんはあまり入ラナイ。(同上)

を挙げているほか、佐藤・山田 2011:78-79 は、自動詞に可能の意味が含まれることがあるとした上で

(66) 棚の上の荷物に手が届カナイ。  
(佐藤・山田 2011:78)

を挙げ、「手が届かない」や「大学に受かった」のような自動詞を用いた表現は「(不)可能」や「実現した結果」を表わすとしている。また、張威 1998:1-4 は

(67) いくら頑張っても、彼との差は縮マラナイ。  
(張威 1998:2)

(68) 腕が痛くて、手が上ガラナイ。(同上)

のような自動詞表現によって表わされる「可能」を「結果可能」とよび、「認識可能」、「能力可能」、「条件可能」となると可能表現のタイプの一つに位置づけている<sup>22)</sup>。

結果可能の表現に用いられる自動詞の中には、それ自身が可能を含意すると認められる「見つかる」、「見える、聞こえる」、「わかる」のようなものがみられる一方、「(連絡が)つく」、「(物が)入る」、「(手が)届く」のように単独では可能を含意すると認め難いものも多い。後者の場合には動詞単独ではなく、表現全体の中で可能の意味を帯びる(つまりは無標)こととなる<sup>23)</sup>。結果可能の表現には、動作主体が存在する場合であっても自動詞を用いてコトガラを自然に生じたもののように表現する日本語の傾向が顕著にあらわれているということができよう<sup>24)</sup>。成戸 2014:31-32、34 においては、日本語可能表現が動作主体を問題としない「～ガ買える、～を買うことガできる」のような形式をとる点をはじめとして状況表現としての性格を備えており、可能を表わすことを中心的な役割としつつコトガラを状況中心に表わす働きをになうという側面を有することを述べた上で、日本語可能表現は状況表現としての性格を備えている点において自動詞表現に近い性格を有するとした。このため、(62)～(63)および(62)'～(63)'における日本語の自動詞表現、可能表現は、「可能の意味を表わす状況表現」である点において共通しており、有情物を主体としてコトガラを動作としての性格が強いものとして表現する(62)～(63)の“arriver/parvenir à+不定詞”表現とは大きく異なることとなる。

ところで、森田 1988:85-87 は、

(69) 荷台が小さくてもう載ラナイ／載セラレナ

イ (森田 1988:85)

- (70) この程度の荷物ならもつと**載ル**／**載せラレル** (同上)

のような無情物について述べる表現においては自動詞と「他動詞+ラレル」の間に意味の類似性がみられ、有情物について述べる場合であっても当人の意思によって決められる事態でなければ、

- (71) こんな重症ではとても**助カラナイ**／**助けラレナイ** (同上:86)

のように二通りの表現形式が成立し、「**助カラナイ**」は「対象の現状をただ見て取った意図主体の判断(主体の行動は考慮外であって、対象事物に対する状況判断だけ)」であるのに対し、「**助けラレナイ**」は「対象へと働き掛ける意図主体の行動の成否に対する判断」であるとした上で、自動詞を用いた場合には、事物の有する属性や現状の説明である

- (72) 水と油は**マザラナイ** (同上:87)  
 (73) 飛行機の窓は**アカナイ** (同上)

のようなケースのほか、実現させようと試みた結果を述べる

- (74) 荷台が高すぎて荷物が**載ラナイ** (同上)  
 (75) なかなかシュートが**決マラナイ** (同上)  
 (76) 体が固くて手先が地面に**付カナイ** (同上)  
 (77) いくら努力しても彼との差が**縮マラナイ** (同上)  
 (78) 腕が痛くて手が**挙ガラナイ** (同上)

などのケースがあるとしている。森田の記述からは、日本語の自動詞表現が「他動詞+ラレル」表現に近い性格を有しながらも使い分けがなされていることのほか、コトガラを「実現させようと試みた結果」として表わす働きをその役割の一つとしていることがうかがわれる。上記のような自動詞表現について、同:88-89には、行為主体が実現させようと試みた結果を問題としているのであるから自動詞を「他動詞+ラレル」形式に置き換えても表現事実に食い違いは生じない反面、前者は「意思的行為の結果」を、後者は「意思的行為そのもの」を問題にするという

相違がある旨の記述がみられる<sup>25)</sup>。自動詞表現が表わす「意思的行為の結果」が張威 1998 の「結果可能」という概念につながっていることは容易にみてとれようが、このような特徴を有する自動詞表現は、主体が行なう動作の結果としての側面を有するコトガラを表わす“arriver/parvenir à+不定詞”表現との間に意味上の接点を有しているとみることができよう。

また、自動詞が可能の意味を含んでいれば、可能形式の場合と同様に「**タ**」形をとって達成を表わすことが予測される。前述したように、可能形式の「**タ**」形は「可能→達成」という意味変化の方向性を有し、このことは(62)の「**見ツカラナイ**」を「**タ**」形にした

- (62)” どうしても万年筆が**見ツカラナカッタ**。

についてもあてはまると考えられる((63)の「**カナッタ**」は「**タ**」形であり、「かなう」は可能を含意する動詞ではなく「達成」そのものを表わす動詞である)。但し、可能を含意しない自動詞の場合には、自動詞そのものが「可能→達成」の意味変化を起こすわけではなく、表現全体の中でそのような意味変化が生じることとなる。

## 5 “arriver/parvenir à+不定詞” と中国語の可能補語

成戸 2014:25-27 においては“V到”表現と日本語自動詞表現についての考察を行ない、ペアとなる他動詞をもつ自動詞を用いた日本語表現が対応する

- (44)’ 找了, 可是**没找到**。  
 /さがしたが、**見ツカラナカッタ**。  
 (成戸 2014:25)

- (79) 你**找到**了什么好工作了么?  
 /何かよい仕事**見ツカリマシタ**か。  
 (『岩波 日中辞典』「みつかる」の項を一部修正)

- (80) 正好那时, **看到**从后面有人出来。  
 /ちょうどそのとき、裏からだれかが出てく

るところが**見エマシタ**。

(《中文版 日语句型辞典》「みえる」の項)

のようなケースをとり上げ、このような対応関係が成立するのは、コトガラを状況中心に表現するという日本語の傾向のほか、「偶然の結果」を表わすことが可能な“V到”が、意志性を含まない日本語自動詞との間に意味上の接点を有することとも無関係ではないとした。また、前述したように、上記の日本語表現に用いられている「見つかる」、「見える」はいずれも可能の意味を含んだ自動詞であり<sup>26)</sup>、この点においても「達成」から「可能」の意味を表わすに至った“V到”との間に意味上の接点を有することができる。

ところで、「結果可能」を表わす日本語自動詞表現に近い性格を有するものを中国語にもとめるとすれば、可能補語を用いた表現が挙げられよう。このことは、張麟声 2001:100-104 が、前掲の張威 1998 による日本語可能表現の分類法を参考として中国語可能表現との相違について考察を行なう中で、

- (81) 大概是生了锈了，这盒盖儿打**不开**啊。  
 /多分さびついたかも、この箱のふた、なかなか**開キマセン**よ。(張麟声 2001:104)

のような日本語自動詞表現と中国語の可能補語表現との対応例をとり上げていることからみてもとれる(自動詞を用いた(62)、(63)の日本語表現は、少なくとも話し言葉においては、可能形を用いた(62)'、(63)'より自然であろう<sup>27)</sup>)。2で述べたように、中国語では動作の過程と結果を分けて表現する傾向が強く、結果の実現が可能か否かを表わす場合には可能補語の形をとることとなるが、無情物について述べる場合もこの点は同様である。但し、動作の過程と結果が分けて表現されるということから、無情物について述べる表現であっても動作主体の存在が(潜在的にはあるが)含意されていると考えられる。これに対し日本語動詞には、過程を表わす傾向が強いという中国語動詞のような特徴がなく、無情物について述べる自動詞表現においては主体の存在が問題とはされない。このため、表現の他動性は、可能補語形式をとる中国語表現の方が高いということとなる<sup>28)</sup>。このことは、“V到”の可能補語形式と日本語自動詞表現との対応例についてもあてはまると推察され、例えば(51)の後件から動作主体“我”を

除いた

- (51)' 因为漆黑，什么也**看不到**。

をみれば理解しやすいのではなかろうか。無情物について述べる場合においても主体の存在を含意する中国語の“V到”表現は、主体の存在を問題とせずコトガラを状況として表わす日本語自動詞表現と、有情物を主体とし、動作としての性格が強いとともに主体が行なう動作の結果としての側面をも有するものとしてコトガラを表わすフランス語の“arriver/parvenir à+不定詞”の中間的な性格を備えた形式であると位置づけることができよう。

ちなみに、“V到”の可能補語形式をとり上げる場合には、肯定形“V得到”と否定形“V不到”の間における使用頻度の差異をも考慮に入れておく必要がある。中国語の可能補語は、肯定形の「動詞+“得”+結果補語/方向補語」よりも否定形の「動詞+“不”+結果補語/方向補語」が圧倒的に多いとされ、このことは、“V到”を含む「動詞+結果補語/方向補語」を可能表現の系列を構成する形式の一つと位置づけるという、2で紹介したような考え方がなされる根拠となっているためである<sup>29)</sup>。また、自動詞を用いた日本語可能表現についても、肯定形と否定形の使用頻度の差異に目を向ける必要があるが、この点に関しては張威 1998:193、204に、肯定形よりも否定形において可能の意味合いが濃厚に表出される傾向にあり、数量の上でも優位に立っている旨の記述がみられる<sup>30)</sup>。自動詞表現は典型的な可能表現(可能形式を用いた表現)ではなく、その肯定形と否定形が使用頻度の点でどの程度の差異を有するか、その差異が可能形式を用いた表現の場合とどのように異なるかということは、自動詞表現に可能表現としての性格をどこまで認めるかということとも密接に関わっていると推察される。一方、フランス語の“arriver/parvenir à+不定詞”表現の場合には、佐藤・山田 2011:83に、“arriver à+不定詞”は

- (82) Je **n'arrive pas à** écrire la lettre.  
 (なかなか手紙が書けない。)  
 (佐藤・山田 2011:83)

のように否定文で用いられることの多い表現形式であり、「やっと手紙が書けた」は“réussir à+不定

詞”を用いて

(83) *J' ai réussi à écrire la lettre.* (同上)

のように表現される旨の記述がみられることから、中国語の“**V**得/不到”表現や日本語の自動詞表現とは異なるレベルの使い分け、すなわち、同一形式の肯定形と否定形の使い分けではなく、“*arriver/parvenir à*+不定詞”表現と“*réussir à*+不定詞”表現、“*finir par*+不定詞”表現などとの使い分けが主となっている可能性を探ってみる必要がある。

## 6 おわりに

以上、「達成」から「可能」を表わすにいたったフランス語の“*arriver/parvenir à*+不定詞”表現を中心として、中国語表現および日本語表現との対応関係や、それらの対応関係が成立する要因を探ることを通して、各表現の特徴や「達成と可能の関係」を明らかにするための着眼点や分析方法、予測される結論などについて述べた。“*arriver/parvenir à*+不定詞”は「到達→達成」のような意味の変遷を経ているとともに、「達成→可能」のような方向性を有し、可能形式としての性格を備えている点において中国語の“**V**到”と共通するが、「達成」を表わす形式としての完成度は“**V**到”よりも高い。一方、日本語の可能形式においては、可能形の「タ形」にみられるように「可能→達成」という方向性を有する点で“*arriver/parvenir à*+不定詞”、“**V**到”の場合とは反対である。また、“*arriver/parvenir à*+不定詞”は、コトガラを状況中心に表わす日本語可能形式とは異なってコトガラを動作としての性格が強いものとして表わす形式であり、「実現(系)可能」を表わすのに用いられる形式であると位置づけることができる。さらに、日本語可能表現の場合には、同一形式の「ル形→タ形」という形で「可能→達成」の連続性がみられるのに対し、フランス語、中国語の場合には動作の実現(非実現)を含意しない“*savoir/pouvoir*+不定詞”、“会/能/可以**V**”、動作の実現(非実現)を含意し「達成→可能(実現(系)可能)」という意味変化の方向性を有する“*arriver/parvenir à*+不定詞”、“**V**到”のようにそれぞれ別個の形式による役割分担がなされており、日本語可能表現とは異なる形での可能、達成の連続性が観察される。

このように、系統を異にする言語であるフランス語、中国語の間には、成戸 2018 a、同 2018 b でとり上げた使役形式の“*faire/laisser*+不定詞”、“叫/让・N+**V**”や、同 2019 a、同 2019 b でとり上げた可能形式の“*savoir*+不定詞”、“会**V**”、さらには本稿でとり上げた“*arriver/parvenir à*+不定詞”、“**V**到”のように、発想のよく似た形式がみられる。このような異言語間の共通点・相似点に着目することは、一つの言語についての分析を通して得られた知見を他言語の分析に生かし、それぞれの言語における諸形式の特徴について従来よりも厳密に記述することを可能にすると同時に、「使役」、「可能」、「達成」が各言語においてどのようにとらえられているか、さらには言語の枠を越えた「使役」、「可能」、「達成」の本質を明らかにすることにつながるという点において極めて重要である。同様のことは「使役」、「可能」、「達成」以外の領域にもあてはまる可能性があり、今後さらに考察の対象を広げていく必要がある。

## 注

- 1) 「達成」を表わす表現形式としては“*arriver/parvenir à*+不定詞”のほか“*réussir à*+不定詞”、“*finir par*+不定詞”が存在するものの、“*réussir*”、“*finir*”はいずれも空間的到達とは関わらない点において“*arriver/parvenir*”とは異なるため、本稿では主たる考察対象としない。
- 2) ちなみに成戸 2019 b :110 では、可能を表わすフランス語の“*savoir*+不定詞”、中国語の“会**V**”について、“*savoir*”、“会”の語彙的意味や、両形式が有情物について述べる場合に限定して用いられることにより、コトガラを「スル」的なものとして表現する形式であるとした。
- 3) ちなみに“*savoir*+不定詞”表現は、成戸 2019 b :103, 107 で述べたように「習得過程」を視野に入れた可能表現である。
- 4) 小熊 2013 :79, 90 には、“*savoir*+不定詞”表現が表わすコトガラは主体の能力が一定水準に達していることを表わし、その具体事例の出現には直接関わらない反面、時空間限定を受けないことは任意の時空間に出現することを妨げない旨の記述がみられ、複合過去形の“*Il a su me comprendre.* (彼は私の言うことを(きちんと)理解してくれた。)”という表現例が挙げられている。同様のことは、“*J' ai pu trouver un appartement convenable.* (手頃なアパートを見つけることができた。)”(『プチ・ロワイヤル和仏辞

- 典』「できる【出来る】」の項)のような“pouvoir+不定詞”表現についてもあてはまると推察される。
- 5)「ドウシテモ〜ナイ」は「ナカナカ〜ナイ」としても同じであり、“Je n'arrive pas à résoudre ce problème. / ドウシテモこの問題を解くコトガデキナイ. / この問題がナカナカ解ケナイ。(『ブチ・ロワイヤル和仏辞典』「できる【出来る】」、「なかなか」の項)”などの対応例がみられる。これらに類する対応例としては、“Nous n'y arriverons jamais, c'est trop difficile! / イツマデタツテモ我々にはデキソウニナイよ、難しすぎる!(『ロベール・クレム和辞典』“arriver”の項)”のようなものが挙げられる。ちなみに、田中・フォルテット 2012:145, 147 には、“avoir du mal a+不定詞(〜するのに苦労する)”表現を“arriver a+不定詞”表現の否定形に言い換えることの可能なケースが紹介されている。
- 6)これらの点については成戸 2014:12-13 を参照。ちなみに、“V 到”の類義形式としては、「達成」を表わす傾向がより強い“V 着”が存在する。この点については同:48-51 を参照。
- 7)“arriver/parvenir a+不定詞”表現と“savoir+不定詞”表現の相違は、感覚動詞表現と“laisser+不定詞”表現の相違に通じるものがある。感覚動詞の場合とは異なり、“laisser”は語彙の意味をとどめつつも文法的な働き(使役)を有する。成戸 2018 a :44-45 を参照。
- 8)成戸 2014:8-11 で述べたように、「動詞+結果補語」の中にはいわゆる動詞が主要部とされるもの、結果補語が主要部とされるものがあり、“V 到”は前者のタイプである。
- 9)これらの点については成戸 2014:11-12, 14-17 を参照。
- 10)ちなみに劉月華 1980:251 には、「動詞+結果補語」、「動詞+“不”+結果補語」が共起する“你猛拉弓, 感觉左手手指碰到箭头, 就是弓拉满了; 碰不到, 就是弓未拉满。(姚雪垠)”などの表現例が挙げられている。
- 11)大河内 1980:70-72、同 1997:144-146、郭春貴 2001:337-340 には、助動詞を用いた可能表現と可能補語を用いた表現についての記述がみられる。
- 12)この点についてはさらに王学群 2008:32-33, 46-47 を参照。同:37 には、一回性の結果的な表現の場合は可能形式によって表現することができない旨の記述がみられ、同:45-46 には、“看不到”、“看不见”は「ポテンシャルな用法(条件的な可能)」として、“没(有)看到”、“没(有)看见”は「限界性のある一回性の運動(状態)」としてコトガラをとらえる旨の記述がみられる。ちなみに同:36 は、“没(有)看到”、“没(有)看见”の肯定形である“看到了”、“看见了”を用いた表現を「一回性の結果的な表現」の例として挙げている。これらの点については、さらに杉村 1988:229 を参照。
- 13)郭春貴 2001:335 は、“\*昨天的菜你吃不完啊?”、“\*昨天他没来, 看不见他。”をいずれも非文であるとしている。
- 14)ちなみに、「達成」を表わす中国語の表現形式としては“V 到”、“V 着”のほかに“V 上”があり、「一定水準への到達」を表わす。“V 上”は“V 到”に比べ、より抽象的な概念を表わす傾向にある。この点については成戸 2014:52-57 を参照。
- 15)佐藤・山田 2011:83 は、「ある行為や状態に到達するというニュアンスも可能性を表す要素です。日本語では『~ようになる』という言い方でそれを表します」としているが、「実現系可能」を表わす形式とはされない。「事態の実現」を表わす可能形の「タ形」の働きについては、鈴木重幸 1972:279、小矢野 1981:24, 31 を参照。小矢野 1979:87-88 には、可能動詞の「タ形」の働きについての分類が示されている。「潜在系の可能」、「実現系の可能」については、さらに渋谷 1993:1-2, 14-26, 29-30、尾上 1998:94-96、高橋ほか 2005:111-114、『現代日本語文法②』:277, 281、『新版 日本語教育事典(「可能文の諸特徴」の項)』などを参照。
- 16)渋谷 1993:27-30、同 2006:61-64 を参照。「狭義の可能」の定義として『日本語文法事典(「可能」の項)』は、尾上 1998:93 の「動作主がその行為をしようという意図を持った場合にその行為が実現するだけの許容性、萌芽がその状況の中に存在する」を引用している。1 で紹介した寺村 1982:269 の記述と方向性は同じである。
- 17)「可能」と「意図成就」については尾上 1998:94-96 でもふれられている。
- 18)渋谷 1993:15-16 は、「完成相可能形式」に関する記述において、「潜在系可能」、「実現系可能」は「状態性」、「動作性」という観点からみたときにその性質を異にするとしている。
- 19)ちなみに井口 2007:42 には、完了アスペクトにおかれた受動的代名動詞の用例には「可能」よりは「自発」に近い性格を帯びたものが多い旨の記述がみられる。
- 20)《新簡明法漢詞典(“arriver”の項)》には“Je suis arrivé à le convaincre. / 我终于说服了他。”、《法漢詞典(“parvenir”の項)》には“Nous parvinmes à lui faire comprendre que... / 我们终于使他明白...”という対応例が挙げられている。
- 21)(62)'の「万年筆ガ見つけられない」、(63)'の「転勤の希望ガかなえられた」は、それぞれ「万年筆ヲ見つけられない」、「転勤の希望ヲかなえられた」としても成立する。この点については『日本語文法事典(「可能」の項)』を参照。
- 22)張威の記述においては、「認識可能」は「ある事態の成立する可能性が現実存在するかどうかを表わすもの」、「能力可能」は「動作主にある動作をする能力があるかどうか

を表わすもの」、「条件可能」は「動作主の意図した動作が主体的または客観的条件によって実現することができるかどうかを表わすもの」とされている。可能表現の分類、自動詞表現によって表わされる可能については、さらに森田 1989:1215-1216、佐藤・山田 2011:78-79、82、『日本語誤用辞典(「可能文」の項)』を参照。金子 1980:66 の「可能表現の形式としていままでにとりたてて論じられてきたもの以外にも研究される必要のあるものがあるのではないか」という指摘は、それまで可能形式として扱われてこなかった「結果可能」について考察する必要性を示唆しているようにも解される。

- 23) 可能を含意する自動詞については寺村 1982:272、276-277、尾上 1999:87-88、『日本語基本動詞用法辞典(「みつかる」の項)』、『広辞苑(「わかる」の項)』、『日本語誤用辞典(「可能文」の項)』を、「無標の可能」という考え方については張威 1998:191-193 を参照。
- 24) 日本語のこのような傾向については、成戸 2009:195-196、同 2014:25-27、佐藤・山田 2011:82 を参照。
- 25) ちなみに、森田 1988:89-90 には「いくら頼んでも金は出ナイよ/出セナイよ」のような自動詞と可能動詞の使い分けについての記述がみられ、前者には話し手の意思や希望を超えた客観的条件・理由によって可能・不可能であるという意味が潜むのに対し、後者は話し手の側に責任を置いた言い方であるとしている。
- 26) 成戸 2014:28-30 においては、“V<sub>到</sub>”表現が日本語自動詞表現、可能表現の双方に対応するケースをとり上げた。
- 27) この点については、さらに呂雷寧 2015:152-154 を参照。但し、同書は日本語自動詞表現と“会/能”を用いた中国語可能表現との対応例をも含めてとり上げている。
- 28) これらの点については、「見つかると“找到”の比較を行なった成戸 2014:235-238 を参照。成戸 2009:278 では、トコロにおけるモノの存在を前提とした“モノ+V+在・トコロ”表現においてはVと“在”が意味の上で「動作—結果」の関係にあるため、コトガラの潜在的な構成成分としての主体が“トコロ+V+モノ”表現の場合よりも強く含意されており、表現の他動性がより高いとした。「他動性」については同:263-265 を参照。
- 29) これらの点については大河内 1980:67、70、同 1997:141-142、144、杉村 1988:215、218、225-226、刘月华 1980:247 を参照。
- 30) この点については、張威 1998:193 に『外国人のための基本語用例辞典』の用例をふまえた記述がみられる。ちなみに、尾上 2003:36-37 には、「事態の生起そのことを語る用法」の「ラレル文」においては、不可能を表わす用法が歴史的に可能を表わす用法に先行して発生した旨の記述がみ

られ、同様の記述は『古典語現代語助詞助動詞詳説』:71、77 にもみられる。

## 参考文献

- 朝倉季雄『フランス文法事典』, 白水社(1955)。
- 朝倉季雄『新フランス文法事典』, 白水社(2002)。
- 天羽均・大槻鉄男・佐々木康之・多田道太郎・西川長夫・山田稔・Jean Henri Lamare 編『クラウン仏和辞典』, 三省堂(7版 2015)。
- 荒川清秀 1981. 「中国語動詞にみられるいくつかのカテゴリー」, 『文学論叢』第 67 輯, 愛知大学文学会, 1-25 頁。
- 荒川清秀 1982. 「中国語の語彙」, 森岡健二・宮地裕・寺村秀夫・川端善明編集『講座 日本語学 12 外国語との対照Ⅲ』, 明治書院, 62-84 頁。
- 荒川清秀 1989. 「補語は動詞になにをくわえるか」, 『外語研紀要』第 13 号, 愛知大学外国語研究室, 11-24 頁。
- 井口容子 2007. 「代名動詞の意味・機能的ネットワーク — 自発, 受動, 非人称 — 」, 『フランス語学研究』第 41 号, 日本フランス語学会, 31-44 頁。
- 井島正博 1991. 「可能文の多層的分析」, 仁田義雄編『日本語のヴォイスと他動性』, くろしお出版, 149-189 頁。
- 市川保子編著『日本語誤用辞典 外国人学習者の誤用から学ぶ日本語の意味用法と指導のポイント』, スリーエーネットワーク(2010)。
- 『NHK ラジオ フランス語講座』2003 年 9 月号, 日本放送出版協会。(略称 NHK)
- 王学群 2008. 「『見える』と“看得见”について」, 『日本語と中国語の可能表現』, 日中対照言語学会(白帝社), 27-52 頁。
- 大賀正喜・兼子正勝・川竹英克・田桐正彦・水林章編『プログレッシブ仏和辞典』, 小学館(2版 2008)。
- 大河内康憲 1980. 「中国語の可能表現」, 『日本語教育』第 41 号, 日本語教育学会, 61-73 頁。
- 大河内康憲 1997. 「中国語の可能表現」, 『中国語の諸相』, 白帝社, 135-148 頁。
- 小熊和郎 2013. 「動詞 savoir とその周辺」, 東京外国語大学グループ《セメイオン》『フランス語をとらえる フランス語学の諸問題Ⅳ』, 三修社, 76-92 頁。
- 尾上圭介 1998. 「文法を考える 6 出来文(2)」, 『日本語学』1998 年 9 月号, 明治書院, 90-97 頁。
- 尾上圭介 1999. 「文法を考える 7 出来文(3)」, 『日本語学』1999 年 1 月号, 明治書院, 86-93 頁。
- 尾上圭介 2003. 「ラレル文の多義性と主語」, 『言語』2003 年 4 月号, 大修館書店, 34-41 頁。
- 郭春貴 2001. 『誤用から学ぶ中国語 — 基礎から応用まで



- 』, 白帝社。
- 金子尚一 1980. 「可能表現の形式と意味(I) — “ちからの可能”と“認識の可能”について —」, 『共立女子短期大学(文科)紀要』第23号, 62-76頁。
- 川村大 2004. 「受身・自発・可能・尊敬 — 動詞ラレ形の世界 —」, 尾上圭介編『朝倉日本語講座6 文法II』, 朝倉書店, 105-127頁。
- 木村哲也 2016. 『フランス語作文の方法(表現編)』, 第三書房。
- 倉石武四郎・折敷瀬興編『岩波 日中辞典』, 岩波書店(1983)。
- グループ・ジャマシイ編著《中文版 日本語句型辞典 日本語文型辞典 中国語訳(簡体字版)》, くろしお出版(2001)。
- Claude ROBERGE・Solange 内藤・Fabienne GUILLEMIN・加藤雅郁・小林正巳・中村典子『21世紀フランス語表現辞典 — 日本人が間違えやすいフランス語表現 356項目 —』, 駿河台出版社(2版2004)。(略称21世紀)
- 小池清治・小林賢次・細川英雄・犬飼隆編集『日本語学キーワード事典』, 朝倉書店(1997)。
- 小泉保・船城道雄・本田晶治・仁田義雄・塚本秀樹編『日本語 基本動詞用法辞典』, 大修館書店(1989)。
- 小矢野哲夫 1979. 「現代日本語可能表現の意味と用法(I)」, 『大阪外国語大學學報 45 言語編』, 83-98頁。
- 小矢野哲夫 1980. 「現代日本語可能表現の意味と用法(II)」, 『大阪外国語大學學報 48 言語編』, 19-33頁。
- 小矢野哲夫 1981. 「現代日本語可能表現の意味と用法(III)」, 『大阪外国語大學學報 54 言語編』, 21-34頁。
- 近藤安月子+姫野伴子編著『日本語文法の論点 43「日本語らしさ」のナゾが氷解する』, 研究社(2012)。
- 佐藤淳一 1992. 「フランス語の不定詞構文と準助動詞について」, 『筑波大学フランス語フランス文学論集』第7号, 筑波大学フランス語・フランス文学研究会, 87-104頁。
- 佐藤康・山田敏弘 2011. 『日本語から考える! フランス語の表現』, 白水社。
- 讃井唯允 1996. 「結果補語・方向補語とアクションスアルト(1)」, 『中国語』1996年7月号, 内山書店, 28-31頁。
- 渋谷勝己 1993. 「日本語可能表現の諸相と発展」, 『大阪大学文学部紀要』第33巻第1分冊, 1-260頁。
- 渋谷勝己 2005. 『新版 日本語教育事典』, 大修館。
- 渋谷勝己 2006. 「自発・可能」, 小林隆編『シリーズ方言学2 方言の文法』, 岩波書店, 47-92頁。
- 新村出編『広辞苑』, 岩波書店(5版1998)。
- 杉村博文 1988. 「可能補語の考え方」, 大河内康憲編集『日本語と中国語の対照研究論文集(上)』, くろしお出版(1992), 213-232頁。
- 鈴木重幸 1972. 『文法と文法指導』, むぎ書房。
- 鈴木信太郎・中平解ほか著『新スタンダード仏和辞典』, 大修館書店(1987)。
- 高橋太郎・金子尚一・金田章宏・齋美智子・鈴木泰・須田淳一・松本泰丈著 2005. 『日本語文法』, ひつじ書房。
- 田中幸子・イザベル フォルテット 2012. 『フランス語 語彙をひろげる7つのテクニック』, 白水社。
- 田村毅・倉方秀憲・恒川邦夫・吉田城・春木仁孝・牛場暁夫・東郷雄二・石井洋二郎・支倉崇晴編『ロワイヤル仏和中辞典』, 旺文社(2版2005)。
- 中條屋進・丸山義博・G. メランベルジェ・吉川一義編集『デイクロ仏和辞典』, 白水社(2003)。
- 張威 1998. 『日本語研究叢書 10 結果可能表現の研究 — 日本語・中国語対照研究の立場から —』, くろしお出版。
- 張麟声 2001. 『日本語教育のための誤用分析 中国語話者の母語干渉 20例』, スリーエーネットワーク。
- 張黎・佐藤晴彦・内田慶市 1997. 『中国語表現のポイント 99』, 好文出版。
- 恒川邦夫・牛場暁夫・吉田城編『プチ・ロワイヤル和仏辞典』, 旺文社(3版2010)。
- 寺村秀夫 1982. 『日本語のシンタクスと意味 第I巻』, くろしお出版。
- 中村敦子 2001. 『音読仏単語 1 日常生活編』, 第三書房。
- 成戸浩嗣 2009. 『トコロ(空間)表現をめぐる日中対照研究』, 好文出版。
- 成戸浩嗣 2014. 『日中・日仏対照研究』, 好文出版。
- 成戸浩嗣 2018a. 「フランス語の使役表現をめぐる対照研究方法論(上) — 中国語・日本語の視点から —」, 『現代マネジメント学部紀要』第6巻第2号, 愛知学泉大学現代マネジメント学部, 29-49頁。
- 成戸浩嗣 2018b. 「フランス語の使役表現をめぐる対照研究方法論(下) — 中国語・日本語の視点から —」, 『愛知学泉大学紀要』第1巻第1号, 愛知学泉大学, 63-82頁。
- 成戸浩嗣 2019a. 「フランス語の可能表現をめぐる対照研究方法論 — “savoir/pouvoir+不定詞”と中国語・日本語の可能表現(上) —」, 『愛知学泉大学紀要』第1巻第2号, 愛知学泉大学, 53-66頁。
- 成戸浩嗣 2019b. 「フランス語の可能表現をめぐる対照研究方法論 — “savoir/pouvoir+不定詞”と中国語・日本語の可能表現(下) —」, 『愛知学泉大学紀要』第2巻第1号, 愛知学泉大学, 103-116頁。
- 西村牧夫・鳥居正文・中井珠子・飯田良子・曾我祐典・菊地歌子・井元秀剛・増田一夫編訳『ロベール・クレ仏和辞典』, 駿河台出版社(2011)。
- 日本語記述文法研究会編『現代日本語文法②』, くろしお出版(2009)。
- 日本語教育学会編『日本語教育事典』, 大修館書店(縮刷版)

- 1987)。
- 日本語教育学会編『新版 日本語教育事典』, 大修館書店 (2005)。
- 日本語文法学会編『日本語文法事典』, 大修館書店 (2014)。
- 馬俊栄 2009. 「日本語可能表現のタ形用法に対応する中国語表現をめぐって」, 『日中言語対照研究論集』第11号, 日中対照言語学会, 108-121頁。
- 文化庁『外国人のための 基本語用例辞典』(2版 1975)。
- 松村明編『古典語現代語助詞助動詞詳説』, 学燈社(1969)。
- 丸尾誠 1997. 「“V+到+L”形式の意味的考察」, 『中国言語文化論叢』第1集, 東京外国語大学中国言語文化研究会, 103-123頁。
- 森田良行 1988. 『日本語の類意表現』, 創拓社。
- 森田良行 1989. 『基礎日本語辞典』, 角川学芸出版(10版 2005)。
- 劉月華著／平松圭子・高橋弥守彦・永吉昭一郎訳『中国語の表現と機能』, 好文出版(1992)。
- 呂叔湘主編／牛島徳次・菱沼透監訳『中国語文法用例辞典——《現代漢語八百詞增訂本》日本語版』, 東方書店(改訂版 2003)。
- 呂雷寧 2015. 「認識モダリティとの関連性から見た日本語における『可能』の本質」, 『日本語と中国語のモダリティ』, 日中対照言語学会(白帝社), 143-159頁。
- 六鹿豊 2016. 『これならわかる フランス語文法 入門から上級まで』, NHK出版。
- 陳永生 1992. <也谈动词后面的“到”——《谈谈动词谓语句后面的“到”的性质和作用》质疑>, 北京语言学院语言教学研究所选编《现代汉语补语研究资料》, 349-358頁。(原载《重庆师范学院学报》1981年第2期)
- 《法汉词典》, 上海译文出版社(1979)。
- 广州外国语学院法语专业《新简明法汉词典》, 商务印书馆(1983)。
- 刘月华 1980. <可能补语用法的研究>, 《中国语文》1980年第4期, 中国社会科学出版社, 246-257頁。
- 刘月华・潘文娉・故群《实用现代汉语语法》, 外语教学与研究出版社(1983)。
- 呂叔湘主編《现代汉语八百词(增订本)》, 商务印书馆(1999)。
- 孟琮・郑怀德・孟庆海・蔡文兰編《动词用法词典》, 上海辞书出版社(1987)。

### 用例出典

《漂亮妈妈》, 导演-孙周, 珠江电影制片公司(2000年)。

(原稿受理年月日: 2020年1月14日)